

北海道の縄文・続縄文文化の狩猟と漁撈

—動物遺存体の分析を中心として—

西 本 豊 弘

はじめに	3 動物群ごとの出土内容の特徴
1 資料について	a 貝類
2 地域ごとの動物遺存体の特徴	b ウニ類
a 苫小牧～千歳低地	c 魚類
b 内浦湾沿岸	d ウミガメ類
c 津軽海峡沿岸	e 鳥類
d 日本海沿岸	f 哺乳類
e オホーツク海沿岸	4 まとめ
f 北海道東部太平洋沿岸	

はじめに

北海道の縄文文化が、その地方的特徴を持ちながらも、日本列島全体の縄文文化に包括されることは、土器等の研究によって明らかである。また、その生業の基本を成すものが狩猟・漁撈・採集活動であったことも共通している。しかしながら、本州の縄文文化と比較して、生業の上で北海道独自の性格があるのかどうか、また、それはどのようなものかについて、動物遺存体の分析を中心として考えてみたいと思う。この問題は、本州の縄文文化が弥生文化となった後も、北海道では狩猟・漁撈を基本的生業とする続縄文文化が続いた現象に対して、どのように考えるかということにも関連している。筆者は、農耕文化が本州に比べて北海道に遅く伝わったのは、もちろん地理的条件にも大いに影響されたであろうが、北海道での狩猟・漁撈活動の安定性の強さもその一因ではなかったかと考えている。

そこで、本論では、北海道の縄文文化から続縄文文化の生業を一連のものとする立場から、この2つの文化の生業を一括して取りあげて、その特徴を考えてみたいと思う。

はじめに

第1表 遺跡出土の主要動物遺存体

遺跡	種名	時期																						
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21		
		クボガイ類	ヒメゾイボ	イガテガイ	ホタテガイ	マガガキ	ウバガキ	ウチムラサキガイ	ハマグリ	コタマガイ	ウネナシトマヤガイ	アサリ	ヤマトシジミ	ウニ	サメ・エイ	サシマス	ニシ	ウシ	シシ	ウシ	ボシ	スズ	マダラ	
1. 美々貝塚	前					+	○	+	+			○	○	◎				○	+	+	◎	○	○	
2. 美々4遺跡	後																	○	+	+				
3. 美沢4遺跡	前				+	○	+		+		○	○	◎					○	+	○	○	○	+	
4. 植苗貝塚	前～中				+	○	+		+	+	○	○	◎					+	+	+	○	○	+	
5. 柳館貝塚	中			+		○	+					○	◎					+	+	+	+	○	+	
6. 虎杖浜2遺跡	前			+	+	+	+		+	○		+	◎	○				+	+	+		+	+	
7. 本輪西貝塚	統縄文																							
8. 北黄金貝塚(A')	前	○	○	◎	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	+	○		○	+			○	○	+
9. 若生貝塚	早～前			○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○											
10. 南有珠6遺跡	統縄文	+	+	◎	○	+	+	+	+	+	+	◎		◎				+	+	◎	+	+	○	
11. 入江貝塚	中～後	○	○	○	○		○	○				○								◎		◎	○	
12. 小幌洞窟(B)	統縄文																	+					+	
13. 栄浜1遺跡	中	○	◎		+	○	○				○			○				+	+	+			+	
14. 尾白内貝塚	統縄文			+	+	+	+	+	+	+								+					+	+
15. サイベ沢遺跡	前								○			○											+	
16. 戸井貝塚	中	○	○															○						
17. 稲倉石岩陰	後										+							+	+	+	○			
18. 三ツ谷貝塚	後～晩	+	+	+	+	+	+											+	+	+				
19. 瀬棚南川遺跡	統縄文																	+	◎	+				
20. 栄磯岩陰	中～統縄文	○	○	◎	+					+	+			○				+	+	◎	+	+	+	
21. 茶津洞穴	後	+	+																				+	
22. フゴッベ洞穴	統縄文	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			+										
23. 江別太遺跡	//																	○					○	
24. 船泊砂丘遺跡	後	+					+																	
25. 朝日トコロ貝塚	中	+	+		◎	+		+					+					○	+	+	+	+	+	
26. 大曲洞穴	前			+		◎	+		○	+	○	○						+	○					
27. 網走湖底遺跡	早																				+	+	+	
28. 尾河台地遺跡	晩																	+	+					
29. 三ツ浦遺跡	統縄文																	+	○					
30. 東釧路貝塚	前	+	+	○	+							◎						+	+	◎	+	+	○	○
31. 細岡貝塚	//	+	+	+	○			+				◎												
32. 緑ヶ岡遺跡	晩			+	+													+				+	+	

(註) ◎: 多量, ○: 少量, +: 極く少量, 早・前・中・後・晩: 縄文時代の時期区分

1 資料について

1 資料について

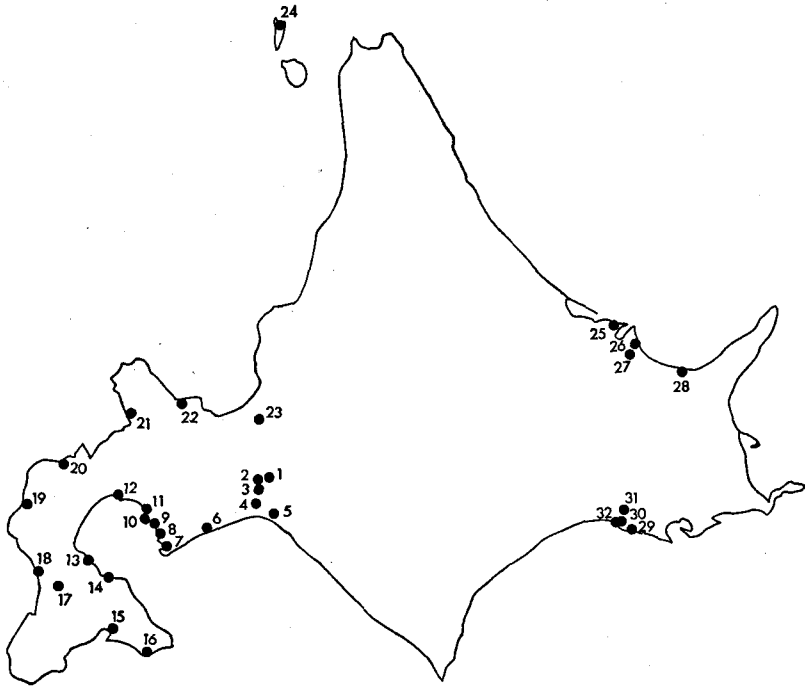
北海道における貝塚の調査は、第2次大戦後各地で盛んに行われてきたが、発掘報告書が刊行されないものや、報告が出されても、動物遺存体の記載が貝の種名のみで終るものが多い。そこで、ここで取り扱う資料は、これまでに知られている多くの遺跡のうち、直良信夫・金子浩昌及び筆者によって動物遺存体の種名と部位が同定された遺跡を中心とせざるを得ない。また、出土内容が分かっているにもかかわらず報告書未刊のため動物遺存体の内容をくわしく公表できないものもある。したがって、筆者にとって奥歯に物がはさまったような表現をせざるを得ないところもあり、提示する資料の不十分さを痛感しているが、現在の時点で北海道の縄文・続縄文文化の生業について、筆者の所見を一応まとめてみるのも無駄ではあるまいと考えている。未発表の資料が速やかに公表されることを切望する次第である。なお、動物種名については、出土した種名をすべて表示していないので、出土量等を含めた詳細な動物遺存体の内容については、各報告書を参照されたい。

2 地域ごとの動物遺存体の特徴

a 苫小牧～千歳低地 (No. 1～No. 6 遺跡)

縄文時代前期から中期はじめにかけて、現在の苫小牧低地附近は内湾となっており、そこに注ぐ河川の川口部に生息するヤマトシジミを主体とする貝塚が内湾を望む台地の縁辺に形成された。第1表のNo. 1・3～6の5ヶ所の貝塚の他に、苫小牧市静川16遺跡（報告書作製中）、柏原貝塚⁽¹⁾と早来町の貝塚（未調査）⁽²⁾も同時期のヤマトシジミを主体とする貝塚であり、厚い火山灰の下にはなお多くの同様の貝塚が存在していると思われる。

このタイプの貝塚に含まれる動物遺存体の特徴は、ヤマトシジミが貝類組成の90%以上を占める点が共通しているだけでなく、魚類・鳥類・哺乳類の内容もよく似ていることである。魚類ではニシン、ウグイ、メナダ(ボラ類)⁽³⁾、スズキ、ガンギエイ類が多い。スズキとボラ類は現在でも苫小牧から内浦湾でみられるが、当時のほうが暖流の影響が強かったのかもしれない。また、この2種の生態から考えて、これらの2種が内湾の浅場に多く分布する夏期を中心にした時期に漁獲されたものと思われる。



第1図 動物遺存体出土の主要遺跡

- | | | |
|--------------|-------------|-------------|
| 1. 美々貝塚 | 12. 小幌洞窟(B) | 23. 江別太遺跡 |
| 2. 美々4遺跡 | 13. 栄浜1遺跡 | 24. 船泊砂丘遺跡 |
| 3. 美沢4遺跡 | 14. 尾白内貝塚 | 25. 朝日トコロ貝塚 |
| 4. 植苗貝塚 | 15. サイベ沢遺跡 | 26. 大曲洞穴 |
| 5. 柳館貝塚 | 16. 戸井貝塚 | 27. 網走湖底遺跡 |
| 6. 虎杖浜2遺跡 | 17. 稲倉石岩陰 | 28. 尾河台地遺跡 |
| 7. 本輪西貝塚 | 18. 三ツ谷貝塚 | 29. 三ツ浦遺跡 |
| 8. 北黄金貝塚(A') | 19. 瀬棚南川遺跡 | 30. 東釧路貝塚 |
| 9. 若生貝塚 | 20. 栄磯岩陰 | 31. 細岡貝塚 |
| 10. 南有珠6遺跡 | 21. 茶津洞穴 | 32. 緑ヶ岡遺跡 |
| 11. 入江貝塚 | 22. フゴッペ洞穴 | |

る。ニシンは春から夏に、またサケ類は夏から秋が漁期であろう。ガンギエイ類や小型のサメ類が多く捕獲されているが、種不明の体長10cm以下と思われる小魚が多いことと考えあわせると、浅い砂泥性の海の一部分をとり囲んで、その中の魚を一括して漁獲する方法が行われたと推測される。美沢4遺跡で石錘が多く出土しており、何らかの網漁も行われたのではなかろうか。

鳥類の出土は多くない。アホウドリ類、カモ類、ウ類等の水鳥がみられるが、ワシ、タカ類も少量ずつ含まれている。哺乳類の出土量も少ない。内浦湾岸の遺跡とは

2 地域ごとの動物遺存体の特徴

異なって、海岸に立地するにもかかわらずトドやオットセイよりもエゾシカのほうが多い。アホウドリ類やカモ類の出土や海獣類の少ないこと、魚類の漁獲時期から考えると、これらの遺跡は冬期を除いた時期、すなわち、春～秋のある時期に利用された場合が多かったと推測される。

ただし、このタイプの貝塚は、竪穴住居址群を出土する台地の斜面に形成された静川遺跡や竪穴住居址を伴うと推測される台地上にある虎杖浜2遺跡等と、竪穴住居址を伴わない美沢4遺跡や美々貝塚等にみられるように、その性格は様々であるかもしれない。美沢4遺跡や美々貝塚は、遺構・遺物の出土状態や地理的状况から、他の集落（美沢川流域の遺跡群？）に附属する遺跡と考えたのであるが⁽⁴⁾、この2遺跡と静川16遺跡出土の動物遺存体及び土器、石器、骨角器の内容がどのように違うのか興味を引かれる問題である。

なお、美々4遺跡は、「のみ口」部分の川底堆積物に後期の土器とともに動物遺存体が含まれていた。イノシシの骨が少量出土している点が注目される。

b 内浦湾沿岸 (No. 7～No. 14 遺跡)

内浦湾沿岸は、日本列島の中で縄文時代から統縄文時代にかけて貝塚が盛んに形成された地域のひとつである。特に北岸の室蘭から伊達市・虻田町にかけては、鶯別、本輪西、北黄金、若生、有珠善光寺、入江、高砂、礼文華、小洞洞穴、静狩貝塚等の著名な遺跡が分布している。一方、湾奥部では八雲町栄浜1遺跡が多くの竪穴住居址を伴う大遺跡であり、また南岸でも茅部町の縄文時代の遺跡群や尾白内貝塚が知られている。しかしながら、これらの遺跡の調査が行われているにもかかわらず、動物遺存体の量的記載が行われた発掘調査報告書はほとんど刊行されていないのが現状である。したがって、ここでは具体的な数量を示すことのできるの南有珠6遺跡だけであり、資料不足ではあるが、この地域での生業活動について、筆者の所見をもとに現時点での考えを述べてみたい。

さて、この地域では、前期の北黄金貝塚、後期の入江貝塚、統縄文文化期の南有珠6遺跡を中心に各遺跡の内容を簡単にみてみたい。北黄金貝塚は、若生貝塚と同様に、海岸に面する台地の縁辺の湧水のある場所に立地している。縄文時代早期から統縄文文化期まで遺物が分布しているが、第1表に示したのは前期の貝層の内容である。貝類では、イガイ類が最も多く、マガキ、ウバガイ、ウチムラサキガイ、コタマガイも多い。ハマグリは、本州の貝塚のようにハマグリ主体の貝層はなく、中～小型のハマグリが少量含まれるだけである。魚類ではマグロの椎骨が目立ち、またカサゴ類（ソ

第2表 主要哺乳類の推計最小個体数

遺 跡	時期	エゾシカ	キタキツネ	オットセイ	トド	アシカ	イルカ類
美々貝塚	前期	5			2		
美沢4遺跡	"	11		2	4		
北黄金貝塚(A) G-12区	"	7	1	52 (成6, 若23, 幼23)	1	2	3
入江貝塚	後期	49	3	11	4	2	13
南有珠6遺跡	続縄文	7	8	87 (成8, 若16, 幼~若63)	1	1	4

(註) 北黄金貝塚, 入江貝塚の資料が未公表のため, 推計最小個体数でその出土内容の概要を示した。成: 成獣, 若: 若獣, 幼: 幼獣

イ類), スズキもかなり含まれていた。鳥類は少なく, 種名が判明したのはオオハム類だけである。哺乳類ではオットセイが最も多く, 獣骨の8割程度を占める。生後半の幼獣や1~2年の若獣が主体であり, 雄の成獣は少ない。エゾシカは獣骨の約1割以下と少ないが, 当遺跡の別の地点ではもう少し多いという⁽⁵⁾。

若生貝塚は, 貝塚組成では北黄金貝塚とよく似ているが, エゾシカが多いという。ただし, 獣骨の出土量は多くはない。エゾシカ以外の哺乳類や魚類も含まれていたが, その種名や出土量は明らかではない。

入江貝塚は, 海岸を望む台地の縁辺にあり, 後期の貝層が調査されている。イガイ類, ホタテガイ, マガキ, ウチムラサキガイ, アサリ等が多いが, 魚類・鳥類の内容は不明である。哺乳類はエゾシカが最も多く, オットセイ, イルカもかなり含まれている。

南有珠6遺跡は有珠湾の東方のアトリ岬にある。有珠湾一帯の海岸部には縄文・続縄文文化期の遺跡が多いが, この遺跡はその中では比較的小さな遺跡である。北方約500mの海岸砂丘上には, この遺跡とはほぼ同時期で, 墓を伴う南有珠7遺跡がある。南有珠6遺跡出土の主要な動物種の出土量を第2表に示した。貝層はエゾイガイが主体であり, ムラサキインコ, アサリ, タマキビも多く, タマキビのみがレンズ状に堆積しているところもみられた。ホタテガイは, 殻に1~2孔をもつものが多く, おそらく, ヤス状の器具で漁獲された時の痕跡であろう。ウニ類は, 貝層にかなり多量に含まれていたが, それのみの厚いレンズ状堆積を示すほどには多くない。エゾバフンウニとキタムラサキウニの2種が認められた。魚類ではニシンと大型のカレイが最も多い。カサゴ類とマダラも多く, サケ類, スズキ, ホッケ等も含まれていた。鳥類は

2 地域ごとの動物遺存体の特徴

ヒメウ、アホウドリ、カモ等がみられたが、出土量は少ない。哺乳類は多量に出土したが、その破片数及び推計最小個体数の約90%は、オットセイであった。雌雄の成獣も含まれているが、幼・若獣が主体である。その他ではトド、アシカ、イルカ、キタキツネ、エゾシカ、イス、イノシシ、ツキノワグマ(?)が含まれていた。エゾシカはごく少量である。なお、この遺跡では、トチノキの種子が主体になる薄い炭化物層が1層みられた。

その他の遺跡についてみてみると、本輪西貝塚ではヒグマが多いことが特徴である。また、小幌洞穴B地点では、エゾシカが多いがオットセイもみられる。栄浜1遺跡は、貝の充填されたピットが出土したが、エゾイガイが主体であり、オオバンヒザラガイもかなり含まれていた。またこの遺跡ではウミガメの甲羅片が出土している。尾白内貝塚の資料は表採品であるが、ヒラメの椎骨が多く、またイルカ、クジラの骨も含まれていた。

さて、この地域の生業の特徴であるが、まず、貝類の採取の上で岩礁性と砂泥性の両方の棲息域のものが含まれている遺跡が多いことである。もちろん、アサリが90%以上と思われる縄文・続縄文文化の貝塚も知られているが、縄文時代から続縄文時代まで、その海岸の状況に応じて、様々な貝類の採取が活発に行われたようである。貝類の利用以上に生業活動を特徴づけるものは、オットセイを主体とする海獣猟である。内浦湾は冬から春にかけて多くのオットセイが回遊することで知られており、現代でも、雌や幼・若獣の越冬地として利用されている。このオットセイを対象とした海獣狩猟が、北黄金貝塚の資料によって、少なくとも縄文時代前期以降現代に至るまで盛んに行われていたことが明らかとなった。もちろん、その時代によって、生業の中での海獣狩猟の持つ意味は変化して行ったことであろうが、狩猟・漁撈・採集を基本的生業とする縄文・続縄文時代においては、ほぼ一貫した経済的意味を持ちつつ、内浦湾でのオットセイ猟やイルカ猟が行われていたと思われる。つまり、内浦湾沿岸での生業体系は縄文時代前期から続縄文時代まで、ほとんど変化していないのではなかろうか。もっともまったく変化していないと言うのではなく、銚先の形態の変遷にうかがえるように、技術的变化等もあったであろうし、それが縄文文化と続縄文文化の相違として認識される所以でもある。また、動物遺存体の内容からみて、これまでも骨角器の発達等から述べられているように、続縄文文化の中の恵山文化の性格は、縄文文化の生業の中で特に海獣狩猟も含む漁撈技術を発達させた人々の文化、すなわち、漁撈文化と言っても良いのではなかろうか。このような漁撈文化が、縄文文化よりも一層発達した理由は明らかではないが、現在のところでは、縄文文化晩期の文化

(おそらく亀ヶ岡文化) から内在的に発達した面が強いのではないかと思っている。そして、縄文時代晩期から統縄文文化の漁撈活動の活発さが、弥生文化の北海道への波及を遅らせた要因のひとつであったのではなかろうか。

c 津軽海峡沿岸 (No. 15, 16 遺跡)

津軽海峡に面する地域も春日町、青柳町、レンガ台等多くの遺跡で知られているが、動物遺存体の内容はよく分らない。ここに示したサイベ沢、戸井貝塚も貝類や魚類・哺乳類の出土量が断片的にうかがえるだけである。戸井貝塚ではオットセイが多く、またエゾシカも比較的多いという。

d 日本海沿岸 (No. 17~No. 24 遺跡)

日本海側の遺跡を便宜上一括したが、調査が進めば、地域ごとに、時代ごとにその生業の特徴を捉えることができるであろう。この地域の遺跡立地は、道南部に多い海蝕洞穴、海岸砂丘、河川流域等のバラエティーが多い。その動物遺存体をみると、稲倉石岩陰は、河川の中流部にあり、平野から山地への接点に位置するが、エゾタヌキ、キタキツネ、ニホンカワウソ等の中型毛皮獣が多く、ハンティング・キャンプ的性格を示している。しかし、カサゴやヒラメ、カレイ等の海の魚が出土し、また、イノシシも含まれていることが興味を引く。三ツ谷貝塚は、海蝕洞穴に形成された貝塚で、人骨の他、エゾシカとイノシシが多いことが特徴である。特に、イノシシは、北海道内で最も多く出土している遺跡である。瀬棚南川遺跡は砂丘上にあり、サケの椎骨が多く出土した。栄磯岩陰はムラサキインコ主体の貝層を形成する岩礁地帯の典型的な海蝕洞遺跡である。ウニ類、ニシン、カサゴ類、エゾシカが比較的多い。茶津2号洞穴も海蝕洞を利用したもので、アワビ、イガイ類、エゾシカ、オットセイ等が出土している。フゴッペ洞穴は石狩湾内にあるが、エゾシカが多い。江別太遺跡は石狩川口より約10km上流の千歳川の河川敷内にあり、サケ類とスズキの捕獲場であった可能性がある。船泊砂丘遺跡は、礼文島にあり、トドやアホウドリが多い。

e オホーツク海沿岸 (No. 25~No. 28 遺跡)

この地域では、オホーツク海岸南部で縄文から統縄文文化期の動物遺存体の出土が知られている。トコロ貝塚では、マガキ主体の貝塚の中にハマグリが含まれており、暖流の影響が現在よりも強かったことを示している。哺乳類は、オットセイ(?)⁽⁶⁾、トド、エゾシカ、エゾヒグマ、イヌ等が出土している。ただし、このオットセイは、

3 動物群ごとの出土内容の特徴

内浦湾出土例のように幼・若獣が主体ではなく成獣が多いように思われる。

大曲洞穴はマガキ主体の貝層があり、オオヤマネコの出土で知られる。網走湖底遺跡は、トド、オットセイ、ヒラメなどが出土しているという。斜里町の尾河台地遺跡は、貝塚や洞穴遺跡ではなく、堅穴住居址内出土の焼骨のために、その当時の生業を考えるには資料的な片寄りがあると思われるが、サケ類やエゾヒグマ、イルカ類等が含まれていた。

f 北海道東部太平洋沿岸 (No. 29~No. 32 遺跡)

釧路川流域は、東釧路貝塚をはじめとして、遺跡が多い地域のひとつである。東釧路貝塚はその中でも最も大きな貝塚遺跡であり、古くから調査・研究が行われている。動物遺存体の出土量も多く、詳細な報告が待たれるが、沢四郎・金子浩昌によると、アサリ主体の貝塚で、ニシン、イルカ、オットセイ等が多く、エゾシカは少ないという。この遺跡では、円形に並べられたイルカの頭蓋骨が出土したことで知られている。細岡貝塚もアサリ主体の貝塚でトド、アシカ類が出土している。緑ヶ岡貝塚は晩期に形成されたが、イルカ、トド、エゾシカ等が出土している。三ツ浦遺跡は、続縄文文化期であるが、ニシン、アイナメが多く出土したことで知られる。

日本海沿岸及び北海道東部のオホーツク海沿岸と太平洋沿岸の遺跡の動物遺存体を見ても、貝類・魚類にはその地域ごとのバラエティーがあるが、哺乳動物については、オットセイ、トド、アシカ、イルカ類等の海棲哺乳類を多く獲っているように思われる。もちろん、これらの海獣類が北海道近海に生息しているために、それらを捕っていたのは当然と言うことが言えるかもしれないが、ただ生息しているから捕るというだけの問題ではないであろう。この点については、次節で若干触れてみたい。

3 動物群ごとの出土内容の特徴

a 貝類

北海道の貝塚の中で、各貝塚ごとに主体を成す貝類を挙げると、前期の苫小牧周辺のヤマトシジミの他、イガイ類、ムラサキイソコ、マガキ、アサリの5種である。その中で、イガイ類、ムラサキイソコは岩礁性海岸地域では縄文時代から続縄文時代にかけての全期間よく利用されていた。マガキは、前期の内浦湾の遺跡や北海道東部の貝塚に多い。アサリは砂泥性海岸だけではなく、岩礁性海岸の処々にみられる砂底に

も生息しているためか、各時代の遺跡にみられるが、内浦湾では中期以降に多くなる傾向がみられる。

b ウニ類

キタムラサキウニとエゾパフソウニがよく利用されている。マガキやエゾイガイ、ムラサキインコが主体の岩礁性海岸の遺跡では、例外なく食用にされていたと考えてよいであろう。

c 魚類

亜寒帯水域に多いニシン、マダラ、ウグイ、カレイ類が主体であることは北海道の地理的条件から納得できることである。しかし、黒潮や対馬暖流の影響も意外に大きく、スズキ、ボラ類、マグロ、ブリなどが各時代の遺跡から出土している。

ところで、サケの出土についてであるが、これまで、サケの骨は貝塚からほとんど出土せず、その理由としては、サケの骨が残りにくいとか、骨まで食べてしまった等と言われてきた。しかし、第1表に示したように、多くの遺跡でサケの骨が出土している。これは、海岸部だけではなく、湯の里遺跡のように、内陸部でも同様であり⁽⁷⁾、統縄文時代以降の北海道の遺跡ではさらにサケの骨の出土例が多くなっている。少なくとも、動物遺存体がある程度の量で出土している場合、しかも、目についた骨だけを採集するのではなく、小さな魚骨やブロックサンプルを採集するほどのていねいさをもって発掘が行われている場合には、筆者が分析したかぎりにおいては、ほとんどすべての遺跡からサケの骨が出土すると言ってよいであろう。しかも、その保存状態はかなり良く、偶然に残ったものとは思われない。そのような保存状態の良い場合でも、現在のところ、縄文・統縄文時代では、海岸部の遺跡でのサケの出土量は、他の魚種に比べてはるかに少ないことは確実である。すなわち、海岸部ではあまりサケを捕獲していなかったと思われる⁽⁸⁾。むしろ、海岸部では、サケを捕獲する技術が不十分であったと言ったほうが適当かもしれないと考えている。もちろん、内陸の河川ではサケは大いに利用されたであろうと思う。

d ウミガメ類

ウミガメ類の骨格も、北海道の各地の遺跡で少量ずつであるが出土している。指骨や甲羅の断片のため種名が定かではないが、暖流に乗って北方海域に広く分布するオサガメやアカウミガメ等が北海道近海に分布することが知られている。また、統縄文

3 動物群ごとの出土内容の特徴

文化期には、土製や骨角製のウミガメ像が知られており、縄文文化人にとって、ウミガメ類はかなり良く知られていた動物であろう。

e 鳥類

鳥骨の出土量は各遺跡ともに少ない。海鳥ではアホウドリ類、ウ類、ガン・カモ類、オオハム類がみられ、またワシ・タカ類も比較的によくみられる種類である。

f 哺乳類

北海道に生息する大型陸獣はエゾシカとエゾヒグマの2種であり、その中でもエゾシカは古代人の食料の主要なものであったことは、遺跡出土の動物遺存体にエゾシカが多いことから明らかである。しかし、海岸部に居住する人々は、エゾシカとともに海棲哺乳類も重要な獲物であった。その中でもオットセイが北海道全域で最もよく利用されている。オットセイは繁殖地が定まっており、また広範囲の回遊を行うことで知られている。内浦湾は西太平洋に分布するオットセイ群の幼・若獣主体の群の越冬地として知られている。遺跡から出土するオットセイの骨格をみると、内浦湾沿岸の遺跡では幼・若獣が主体であり、この地域のオットセイは冬～春と考えられる。この他の地域で出土するオットセイは、幼・若・成・雌・雄のいずれかに片寄る状況はあまりみられない。したがって、内浦湾岸にみられるようなオットセイを中心とした海獣狩猟ではなく、トド、アシカ、アザラシ、イルカを含めた意味での海獣狩猟が行われていたと思われる。トドも回遊することで知られ、秋から冬にかけて北海道近海に現れる。したがって、それらの捕獲も秋から翌春にかけて行われたと考えられるが、礼文島船泊砂丘遺跡の場合は、繁殖地と考えられるトド島があることやアホウドリの骨が多いことから、夏期に捕獲された可能性が考えられる。アザラシ類は道東部に多く分布するが、縄文時代はあまり多く捕獲されていないように思われる。

イルカ類は、リクゼンイルカやカマイルカ、ネズミイルカ等が捕獲されたと思われる。道東部の東釧路貝塚や内浦湾の諸貝塚で積極的に捕獲された。このようなオットセイ、トド、イルカ類のような海獣類の分布が、縄文早期以来の銛先の発達をもたらした。その結果、縄文時代の北海道において、海獣狩猟という独特の生業活動が発達したと考えられるのである。

最後に、北海道におけるイノシシの問題に少し触れておこう。イノシシは、直良信夫による本輪西貝塚での報告以来、20ヶ所近くの遺跡で出土している。三ツ谷貝塚や入江貝塚ではかなり多く出土しており、イノシシの自然分布の可能性を想定する人が

いるかもしれない。しかし、イノシシが分布しているとすれば、北黄金貝塚で出土しないことは不思議であり、また、本州の貝塚の例からみて、イノシシの出土している遺跡ではもっと多量にイノシシの骨が出土してもよいと思われる。したがって、筆者は、イノシシは北海道に自然分布していなかったと考えている。また、イノシシの出土地点は道南部と道東部太平洋岸に限られており、しかも縄文時代後期以降、特に後期末から統縄文文化期にかけての時期が多い。そして、一方では、この地域の晩期から統縄文文化期の遺跡で焼骨を含めて、動物骨格がていねいに採集されている場合は、筆者が分類したかぎりでは、例外なくイノシシの骨がみられるのである。ただし、出土量は少ない。少量であっても、道南部の多くの遺跡からイノシシの骨が出土することは、後期から統縄文文化期にかけて、本州からイノシシが積極的に持ち込まれたことが考えられる。さらに、その場合には、幼獣を持ち込んで北海道内で一定の期間飼養した可能性が高いのではなかろうか。もちろん、イノシシを北海道に持ち込む意味が、単に食料としての意味だけではないであろうし、縄文文化の中での家畜の飼養の程度が、イヌは別として、イノシシの場合に繁殖集団の維持までの完全な意味での家畜化が行われたかどうかは分からない。少なくとも、幼獣を捕獲して、それをある程度大きくするまで飼育する程度のことでは行われていたように思われる。もちろん、イノシシを北海道に持ち込む理由が単に食料としての利用だけではあるまい。おそらく、イノシシを何らかの儀礼に伴って利用したことが十分に考えられ、経済的な側面だけではなく文化的な側面からも、この問題を考えねばなるまい。

4 まとめ

以上、北海道の縄文・統縄文時代の生業について現在の時点での所見をまとめてみた。縄文時代と統縄文時代を一括して述べたのは、北海道での生業活動、特に狩猟漁撈活動を考えると、本論で述べてきたように、縄文時代から統縄文時代にかけては同一の技術・伝統を基本とした一連の生業活動と考えられるからである。もちろん魚形石器の出現や骨角製銚先の形態にみられる特徴など、統縄文文化独自の生業活動の特徴は認められるが、縄文文化と統縄文文化の生業を区分するよりは、一連のものと考えたほうが理解しやすいのである。

さて、具体的な生業活動の特徴であるが、それは内浦湾のオットセイ猟で代表される海獣狩猟が、北海道の海岸部での生業活動の主要なもののひとつであったことである。これは単に本州における主要狩猟獣であるシカとイノシシのかわりに、北海道で

4 まとめ

はエゾシカと海獣類であるという補完関係の問題だけではない。北海道では、海獣狩猟によって、銛等の海獣狩猟道具の発達をもたらしたであろうし、海獣狩猟を主体とした生活パターンも行われていたかもしれない。海の動物への儀礼も本州とは異なっていたかもしれないのである。

さて、北海道全体の縄文時代の生業を考えてみると、内陸部でのエゾシカ猟と海岸部での海獣猟と漁撈活動、河川でのサケ漁、さらに植物質食料の採集と行うことができるだろう。ところで、いわゆる「サケ・マス論」や生業活動の特徴を「サケ・シカ地帯」等の特定の動物種に代表させる考え方があるが⁽⁹⁾、少なくとも北海道に関して言えば、サケの利用は過大評価されすぎる傾向があるように思われる。サケは他の魚類と同程度には利用されていたであろうが、それ以上の大きな意味を付与するのは疑問である。むしろ、縄文時代の食料基盤は、サケやエゾシカ等のある特定の種に片寄るのではなく、1年のそれぞれの時期に、食料の重点を移すというバラエティーの豊かさにあったように思われる。そのバラエティーの中に、気候等の環境の変化を陸獣よりも受けにくい資源豊かな海獣類と魚類を含めていたことが、弥生文化の影響を受けながらも北海道の縄文文化が続縄文文化へと受けつがれた一因ではなかろうかと経済的な側面から考えられるのである。

註

- (1) 遺跡 No. 4・5 の引用文献による。
- (2) 木村尚俊・長沼孝「フレベツ遺跡群」『日本考古学年報』33号、1982年所収
- (3) 筆者が美沢4遺跡の動物遺存体を分類した際に、椎骨及び主鰓蓋骨がボラとしては大きいことと眼前骨の形態から、ボラではなくメナダと同定した。なお美々貝塚の資料もメナダと訂正しておきたい。ただし、眼前骨以外ではボラとメナダの区別は現在のところ困難であり、メナダと考えたものの中にボラが入っている可能性があることと、他の遺跡出土例の取り扱いとの関連で、第1表ではボラ類として一括表示することとした。
- (4) 西本豊弘「狩猟・漁撈の場と遺跡」『季刊考古学』第7号、1984年
- (5) 金子浩昌氏の教示による。
- (6) 直良信夫氏はアシカと同定しているが、トコロ貝塚と同時期に直良氏が分類したトコロチャシ出土の動物遺存体を筆者が再見したところ、アシカではなくオットセイの雄の大きな個体であることが判明した。したがって、トコロ貝塚出土品を実見した訳ではないが、アシカではなくオットセイが多かったのではないかと判断して、ここでは一応オットセイ(?)とした。
- (7) 大島直行他『知内川中流域の縄文時代遺跡—北海道上磯郡知内町湯の里—遺跡発掘調査報告』北海道知内町教育委員会、1979年
松井章・山田格「北海道知内町湯ノ里遺跡」『考古学研究』第28巻第3号、1981年
- (8) 擦文文化以降では海岸部の遺跡でもサケ類はよく利用している。特に道東部では最近のいいいな発掘によって、サケ類が多く出土するようになった。そして、この地域では、サケの利用が縄文・続縄文時代でも盛んに行われたのではないかと考えている。サケの出土例については、梶田光明他『伊茶仁カリカリウス遺跡群』北海道標津町教育委員会、1981年等がある。

- (9) 西田正規「縄文時代の食料資源と生業活動―鳥浜貝塚の自然遺物を中心として」『季刊人類学』第11巻第3号, 1980年

第1表に示した遺跡の引用文献

- No. 1. 佐藤一夫他『美々貝塚』千歳市教育委員会, 1976年
2. 森田知忠他『美沢川流域の遺跡群Ⅰ及びⅡ』北海道教育委員会, 1977年, 1979年
3. 木村尚俊他『フレベツ遺跡群』北海道埋蔵文化財センター, 1980年
4. 5. 佐藤一夫他『植苗貝塚特集』苫小牧市・市史編さん室, 1976年
6. 加藤邦雄他『白老町虎杖浜2遺跡』白老町教育委員会, 1978年
7. 直良信夫「北海道室蘭本輪西貝塚発掘の獣類」人類学雑誌第54巻第10号, 1939年
8. 1981年度発掘のG-12区出土の動物遺存体の筆者の分類所見による。未報告
9. 名取武夫・峰山巖「若生貝塚発掘報告」『北方文化研究報告』第12輯, 1957年
10. 三橋公平編『南有珠6遺跡』札幌医科大学解剖学第2講座, 1983年
11. 動物遺存体の内容は, 金子浩昌氏の教示による。未報告。以前の発掘の報告は, 名取武夫・峰山巖「入江貝塚」『北方文化研究報告』第13輯, 1958年
12. 金子浩昌・西本豊弘の分類による。報告は, 北大解剖教室調査団「小幌洞穴遺跡」『北方文化研究報告』第18輯, 1963年, 資料の分類・公表に際しては, 大場利夫先生の御好意による。
13. 三浦孝一他『栄浜』北海道八雲町教育委員会, 1983年
14. 千代肇他『尾白内』北海道森町教育委員会, 1981年
15. 大場利夫『サイベ沢遺跡』函館市立博物館, 1958年
16. No. 20の文献中の金子浩昌氏の報告による。
17. 田口崇他『稲倉石岩陰遺跡』北海道檜山郡厚沢部町教育委員会, 1979年
18. 金子浩昌・西本豊弘の分類による。未発表。資料の分類・公表は, 大場利夫・渡辺兼庸両先生の御好意による。報告は, 大場利夫・渡辺兼庸『北海道爾志郡三ツ谷貝塚』
19. 加藤邦雄他『瀬棚南川』瀬棚町教育委員会, 1983年
20. 峰山巖他『栄磯岩陰遺跡発掘報告』北海道島牧村教育委員会, 1973年
21. No. 20の文献中の金子浩昌氏の報文による。
22. フゴッペ洞窟調査団『フゴッペ洞窟』ニューサイエンス社, 1970年
23. 高橋正勝他『江別太遺跡』北海道江別市教育委員会, 1979年
24. 1982年度の分布調査時採集の資料による。筆者分類, 未発表。北海道教育委員会高橋和樹氏の御好意による。
25. 駒井和愛編『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡上巻』東京大学文学部, 1963年
26. 金子浩昌「洞穴遺跡出土の動物遺存体」『日本の洞穴遺跡』平凡社, 1967年所収
27. No. 20の文献中の金子浩昌氏の報文による。
28. 金盛典夫他『尾河台地遺跡発掘調査報告書』北海道斜里町教育委員会, 1983年
29. 沢四郎他『釧路市三津浦遺跡発掘報告』釧路市立郷土博物館, 1976年
30. 31. 32. 沢四郎「釧路川流域の先史時代」『釧路川』所収, 1970年

(国立歴史民俗博物館 考古研究部)